内閣総理大臣賞（最優秀賞）

田んぼの水に思いをはせる

東京都　新宿区立西早稲田中学校　二年　秋永　橘香

「水」といって私が一番最初に思いつくのは田んぼの水だ。まだ、幼稚園生だった頃、東京から田んぼや畑が多い地域に引っ越した。ここでは、父に連れられて何度も田植えに行った。田植えの仕方は農家のおじさん達が教えてくれた。水路や堰を管理する土地改良区という組織のおじさんだ。

田植えが終わると、生き物採集が待っていた。毎週毎週、長靴と着替えを持って出かけて行った。おじさん達、地域の小学生と夢中になって、たも網で田んぼや水路をすくった。一緒に水路をすくった小学生とは不思議とすぐに仲良くなれた。捕った生き物を大きな桶に集めた。メダカ、ドジョウ、タモロコ、ギンブナ、スジエビ、水棲昆虫、桶に入りきらない大きなコイ、ナマズが捕れることもあった。私は、すっかり田んぼの生き物が好きになり、自分用のたも網、水槽を揃え、家族で生き物を探しに行くようになった。

稲刈りも終わり、冬が訪れた。少し寂しいと思いながら田んぼを見に行った。田んぼに水はなく、稲の切り株が寂しそうに残っていた。小鳥のさえずりがかすかに聞こえたが、生き物の気配は消え、静まり返っていた。

ドジョウが隠れているかもしれないと思い、水路の小さな水たまりを、たも網ですくってみた。ワァ、思わず声をあげてしまった。網の中に、わずか二ｃｍ位の小さな鮒が三匹、ピチピチと跳ねていたからだ。小さな水たまりに身を寄せ、春を待っていたのだ。こんなに小さくても、一生懸命に生きている。そう思い、慌てて私は小鮒を水路に返した。小さな水たまりが小鮒の命をつないでいたのだ。私もまだ小さかったが、水が命を支えていることを強く感じた。

小学校二年生の時、再び東京に住むことになった。田んぼや水路からは遠く離れたが、そこでの楽しい記憶は鮮明に残っている。

田んぼの水に思いをはせ、人と水について考えてみた。一枚一枚の田んぼを潤す水は、日本人の命を育むお米を育てている。張り巡らされた水路は血管、田んぼをめぐる水は、まるで血液の様だ。人間の体では血液に肺が酸素を供給、肝臓が有害物質を分解、腎臓が老廃物を除去している。この他、心臓、胃や腸、多くの内臓が各々の役割を果たし、命を支えており、どれかが停滞すれば、病気になってしまう。

水も血液と同じだ。汚れたり、不足すれば、人間は生きていけない。田んぼの水も、雨水を蓄える森林、川、ダム、堰、水路、田んぼ、これらが、多くの人々の絶え間ない努力によって守られ、しっかり役割を果たしているからこそ守られているのだ。

田んぼや水路について、知りたくなり、インターネットで調べてみた。血管のように張り巡らされた水路の長さは、四十万ｋｍ、地球十周分に相当する。優しくしてくれた土地改良区や農家のおじさん達が昔から大切に守り続けてきたものだと知り、とても驚いた。

更に調べると、田んぼや水路は、お米を作る以外にも、とても貴重な役割を果たしていることが分かった。雨水を貯めて洪水を防ぐ、土砂崩れを防ぐ、川の流れを安定させる、地下水になる、水を浄化する、気温の上昇を緩和する、生物多様性を保全する、癒しや安らぎをもたらす。この多面的な機能が東京に住む私たちを含むすべての人々の生活を支えている。

田んぼの水はお米の中に蓄えられ、それを食べた人に吸収され、体が作られる。私達が安心して健康に過ごすためには、田んぼや水を守り続けなければならないと強く思った。

水のために私ができることには限界があるが、水を無駄にしない、油や汚い水を流さない、お米や野菜をおいしく食べる。最後に、田んぼや水を守る人達への感謝の心を大人になるまで持ち続けることを決意した。

農林水産大臣賞（優秀賞）

水を想い、水を守る

徳島県　鳴門教育大学附属中学校　二年　川原　もも香

私の家では、毎年、ゴールデンウィーク中に田植えをする。家族全員が大型連休となるこの大切な機会を活用して、「田植え」という共同作業を手早く、かつ愛情を込めて行う。この一大イベントは、肥料をまいて耕運機で土を耕し、あぜをきれいに整え、満を持しての作業となる。

例年通り、五月四日が田植え日と計画し、あらかじめ近所にも周知した。苗箱を運ぶ一輪車や田植え機が道路を走行することで周辺一帯が交通渋滞とならぬよう配慮するためだ。

そして、何よりも大切な「水」がきっちり自分たちの田んぼに利水され、水の量を調節できるよう綿密な計画を立てる。

今年もまた、田植えを行う前日に、田んぼへ水を引いてくる麻名用水に沿った道を歩いた。家族でウォーキングをしながら、近所の田植えの環境が整備されているか、用水に住む生き物のようすも観察しながら確認した。

今となっては見慣れた麻名用水だが、数年前まで、その流れを川だと思い込んで疑わなかった。いつのことだったか、この川の名前は何なのかと母に訊ねると、それは麻名用水という飲料や防火、灌漑のために水を引いたりためたりする施設だと教えてくれた。私の住む地域は稲作に携わっている兼業農家の方が多く、我が家もその中の一軒である。そのため、この用水路には大変お世話になっているということも母は話していた。

一級河川である吉野川はとても澄んだ清流であり、それは地域人ならではの誇りだ。そして、吉野川と同じように、麻名用水から我が家の田へと引かれる水が辿る水路、そしてその水自体が、生活になくてはならない、私の大好きな「水」のひとつである。

また、水についての学習も、毎年の長期休みなどを利用して施設見学を続けている。例として、旧吉野川河口堰などのフィールドワークを通して、吉野川水系は家庭用水だけの役割を果たしているのではなく、工業や農業用水としても重責を担う活用がされていると学べたことが挙げられる。河口堰の存在が計画的にわたしたちの暮らしに大きな役割を果たし、水の流れを調節してくれているからこそ、自分たちも「水」を当たり前に利用できていることを実感する。

自らが田植えの手伝いをするという体験を通して、祖父母、また、曽祖父母の先代人から「水とひととの関わり」を知る。潤沢な水は、非常に長い歴史の中で、たくさんの人の関わりを経て当たり前のように存在する。

蛇口をひねると出てくる水。外の景色に目をやってもあふれている水。それは、過去の人々が残した最大の財産であると私は考える。

だが、年明けの石川県で発生した能登半島地震で被害を受け、断水により不便な生活を余儀なくされた方々を目の当たりにすると、自分たちでつくる食料も、社会全体を取り巻く良質で安全な水があってこそのものであると痛感している。

さて、いつもこの田植えシーズンには、水に対しての敬意が深まる。「おいしいお米を食べられて、健康に生きられているのは水のおかげだ」と。だが、本当は、いついかなるときもそうやって感じていなければいけないことも分かっている。世界中に水を求めてつらい思いをしている方がいて、その方たちのためにもわたしたちが小さなことから行動を起こしていかなければならない。

「水」は、食料となり、人の命綱へと姿を変える。「水」は、商品となり、お金へと姿を変える。「水」は大雨となり災害を引き起こす。「水」は、かたちを変化させ、わたしたちの生活を支えたり、まれに、脅かしたりする。そんな「水」と共存し、ここ徳島から、自らの住む地域の「水」を地域一体となって守り、世界にも目を向けられる広い視野とあたたかい心を抱いた「徳島人」でありたい。

経済産業大臣賞（優秀賞）

水と共に暮らす

北海道　砂川市立砂川中学校　羽川　莉子

私が暮らす砂川市。「砂川」の名前の由来は、アイヌ語の「オタ・ウシ・ナイ」からだという。「オタ」が「砂」、「ウシ」が「多い」、「ナイ」が「川」。そこから「砂川」と名付けられた。名前の通り、砂川は川と深い繋がりがある。

砂川は、石狩川とその支流である空知川が合流する位置にある。明治時代からこの河川を利用してきた。木材の流送や砂利の採取。水田が開かれ、様々な工業も盛んになっていった。やがて人口が増えて砂川市となり、私は今、この町で暮らしている。

私が登校する通学路に橋があり、その下に川が流れている。目を向けると、レジ袋のゴミやペットボトルなどが、無造作に捨てられていた。最初は、嫌だなあと思った程度だった。でも、ゴミの海洋汚染やマイクロプラスチック問題を知ってからは、真剣に受け止めるようになった。人がポイ捨てするゴミが、水を汚す大きな問題を生み出しているのだ。

水を汚すのは、私たちの水への関心が薄いせいではないだろうか。

人間にとって、なくてはならない水。水は、限りある貴重なものである。この日本でも、水不足や水質汚染は現実のものとなっている。そうした環境の中でも、水道から透明なおいしい水が出てくるのは、その仕事に携わっている人たちの努力の賜だ。下水道や河川を管理するのも、全て人の手によるものである。その人たちに水のことを全て任せるだけでは、大切な水は守りきれない。水を使う私たち一人ひとりが、水を守るために行動を起こすべきなのだ。

川と共に暮らしを築いてきた砂川。先人たちの時代から計り知れない苦労と努力を重ね、水の恩恵を受けてきた。水道事業を始め、それは現在も続いている。

石狩川は大きな河川であるため、大雨により川が氾濫し、大きな被害を受けてきた。その被害を防ぐために、八年をかけて砂川に大規模な遊水地を完成させた。遊水地には、大雨が降ったときに石狩川の水を一時的に貯留することで、洪水被害を防ぐ役割がある。そのおかげで、私たちは安心して暮らせているのだ。

砂川の火力発電所では、石狩川の水を利用している。水を加熱して蒸気にし、タービンを回転させて、私たちの暮らしに必要な電力を生み出している。使用済みの温排水は、冬場は流雪溝で歩道の雪を解かすために再利用されている。また、新しくできた化粧品の工場も、工場排水を浄化して、トイレの水として再利用している。しかもその水を再び浄化したあと、池に貯めて水に含まれる余分な養分を微生物や植物に吸収させて、よりきれいな水にしてから石狩川へと流しているのだ。

地域の水を守ってきた苦労の歴史、今も続く水を守るための取組。砂川で暮らす私たち一人ひとりが、しっかりとその思いに応えるべきだと思う。私たちこそが、水の恩恵を直接受けているのだから、水を守るための取組を行っていくことが大切なのだ。

私も、水の出しっぱなしや油や洗剤の排水に気を遣うようになった。ゴミのポイ捨ても絶対にしない。私たちの手で、こうした小さな取組から始めていくことが、水を守ることに繋がっていくのだと思う。中学校でも、地域の清掃活動を行っている。私も参加したとき、水への影響を考えながら、少しでも環境がよくなればと思って、ゴミを拾った。

先日、通学路の川面に鴨がいた。自然豊かな光景に微笑ましく感じた。砂川の遊水地にも、毎年、たくさんの渡り鳥がやってくる。豊かな水が育む豊かな暮らしや自然。水と共に私たちは暮らしている。これからも、水の恩恵に感謝し、水を大切に守りながら、この砂川で暮らしていきたい。

国土交通大臣賞（優秀賞）

災害時協力井戸の活用

三重県　高田中学校　一年　渡辺　心晴

ある夏の暑い日、近所を散歩していると、公園の一角に「この水は飲めません」と注意書きのある井戸を発見した。重いポンプを何度も上下させて、やっと勢いよくはきだされた水を、私は飲みたい気持ちをぐっと堪えて、手を洗った。するとその水は夏の暑さを忘れてしまうくらい冷たく透き通った気持ちのよい水だった。「この水はどこからきているのだろう」ふと疑問に思った。そこで私は井戸について調べてみた。

井戸は人工的に掘ったもので、地下水をくみ上げる目的で使うものだ。井戸は大昔から人々の生活の助けとなってきた。しかし、昔はたくさんあった井戸も近年使われなくなっているものが多いのだそうだ。そして、私が触れた水はいわゆる地下水で、大地に降り注いだ雨や雪が数年、時には数十万年の時間をかけてろ過され、大地に浸透した貴重な資源だったのだ。あの日井戸水に感動した私の「井戸水はどこからくるのか」という疑問は大自然とつながっていたのだ。その時、私は「自然ってすごい」と心揺さぶられた。

一月に能登半島地震が起こった。水道管が破壊され、被災者はとても不便な生活を強いられた。飲料水については、ペットボトルなどの備蓄や応急用水などで確保されたが、大量に必要とされる生活用水は十分な供給までに相当な日数がかかった。私たちは生活用水を平均一人当たり一日２００～３００リットル使用していて、これはペットボトル５００ミリリットルに換算すると約４００～６００本分に相当するのだそうだ。私はもし被災したら、たった一日でどこからそれだけの水を得るのだろうと絶句した。

私は今回起きた災害をニュースで目の当たりにし、この先起こると言われている南海トラフ巨大地震に備え、「生活用水の確保」が必要だという意識が強くなった。そこで井戸のことを思い出した。井戸は発災後の生活に役立つのではないかと考えた。さらに興味を持った私は近所に他の井戸があるのか知りたくなり、探索を始めた。そして隣町に「災害時協力井戸」と掲示してある井戸を発見した。後にこの井戸について調べてみると、井戸の所有者の善意で「災害によって断水が起こったときに誰でも使用してよい」と市役所に登録されている井戸であると知った。さらに、市役所のホームページを見てみると、災害時協力井戸がある場所が表示されているマップも見ることができた。これがあれば、断水が起きた時、みんなが必要な水を確保できるのではないかと思った反面、どれだけの人が災害時協力井戸を知っているのかということを考えると、もっと多くの地域住民がこのことを知るべきなのではないかと思った。せっかく困ったときに使える井戸があるのに、知らない人がいるのはあまりにももったいない。そこで私は、より多くの人に災害時協力井戸の位置や活用法を認知・把握してもらうため、ポスターを制作しマンションや公民館の掲示板に貼りだしてみてはどうかと思った。ポスターを貼ることで災害時協力井戸の存在を知り、いざという時に備えることができる人も増えるだろう。またポスターだけでなく地域の人にも声をかけることで、日頃からコミュニケーションをとり、災害が起きたときに共助が実現するのではないかとも考えた。

私たちは、自然がもたらす災害を避けることはできない。しかし、その自然の恵みを有効に使うことで、発災後の不便な生活にもゆとりが持てるようになるのではないか。だから私はたとえ小さいことだとしても、少しでも多くの人に「災害時協力井戸」の存在を伝えたい。

環境大臣賞（優秀賞）

あまい水

静岡県　不二聖心女子学院中学校　二年　小池　翔子

私の思い浮かべる水辺には、いつもホタルが飛んでいる。我が家の庭に湧水が流れており、毎年初夏になるとゲンジボタルがチロチロ飛ぶ。それを眺めるのが私の夏の風物詩である。

だから私にとってホタルは、身近な生き物だった。幼い頃はどこの川にもホタルがいるものと思っていたから、「ホタルはきれいな水にしか住めないんだよ。汚い水にはまずいまずいって言って寄りつかない。だからうちの水はきれいなんだね。」と、祖母に言われたときは驚いたものだ。そして同時に、誇らしくも思った。それまで当たり前に見てきたホタルと水が宝物のように思えてきた。

この宝物を守らねばという使命感を心に宿した幼い私は、その年のカワニナ撒きをする祖母と兄についていった。カワニナはホタルの幼虫の餌となる水巻貝で、ホタルが元気に育つように、庭の小川に少しずつ足していくのだ。まず祖母が、プラスチックの容器からカワニナを出し、小川の上からばらばらと撒く。次に兄がぼとぼとと水に落とす。順番を待つ私は、この神聖な儀式に、肺が縮むほど緊張していた。ついにカワニナを渡された私は、焦って容器ごと小川の中へ放り投げてしまった。ぼちゃん、と大きな音が鳴り、祖母は笑い、兄は呆れながら容器を拾いに行き、私は自分の立てた水音にびっくりして泣いた。私の水辺での思い出の一つだ。その年もホタルはたくさん飛んだ。

祖母が亡くなって初めての夏、私はカワニナを撒き忘れた。カワニナ撒きは祖母が中心になって行っていたものなので、法事やら何やらがやっと落ち着いた頃には、ホタルの幼虫の季節を過ぎてしまっていたのだ。もうそれなりに大きくなっていた私は、ホタルがもういなくなっているかもしれないと不安に感じつつ、夜の小川まで下りていった。着いた先は真っ暗だった。ホタルの光は一つもない。なんだか怖くなって、手を叩いてホタルを呼んでみた。すると視界の端がチカチカする。その方を見る。やっぱりホタルだった。夢中で手を叩く。叩く度に光が増える。増えていく度に安心した。昔から変わらずに流れるきれいな水が、私が忘れてしまっていた間もホタルたちを守ってくれたのだと思った。

「来い、来い、ホータル来い。こっちの水はあーまいぞ。あっちの水はにーがいぞ。」そう歌って、祖母と一緒にホタルを呼んだこともある。そしてホタルそのものだけでなく、ホタルをめぐる様々な思い出が私の宝物となっていることに気づいた。あまくきれいな水が、私のその宝物を守ってくれたように、私もこの水をずっと変わらず守っていこうと思った。

しかし全国的にみると、ホタルなどの水生生物は年々数を減らしているらしい。これは、河川の汚れ、特に中性洗剤による汚物の沈殿や、農薬や化学肥料の使用により、水が汚れたり餌が減少したりしたことが原因だそうだ。私は美しい水と一緒に、そこに生きていた生き物や風景、そこに住む人々の思い出もなくなってしまったら悲しいと思った。そして、これらをこの先も守っていくためにはどうしたらよいかを考えた。考えた結果、まずは身近にある川の清掃活動に参加することにした。行動を起こすにあたって、世界中の水をきれいにする、だとまだ私には広すぎてピンとこない。けれど、近所の川のごみを拾う、であれば、問題を具体的なものとして肌で感じられるからだ。もちろん、日々の生活の中でも水を汚さずに節水などを心がけていく。

私はホタルや小川が昔と変わらずにあることが嬉しいし、安心する。人は水と共に生きてきた。海や川の思い出を持つ人も多くいるだろう。皆がその思い出を安心して大切にできるよう、私は水をこれからも守っていきたい。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

「輝け　日本の天然水」

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　三年　﨑田　莉央

私は今年、目の手術をします。小さい頃から目が悪かったので、毎年、目の神様のいる神社のお祭りに行っています。そこでは、神社の山の湧き水である御神水が販売されており、目を洗うと眼病が治ると言われています。この湧き水は、誰でも自由に汲むことができるので、行ってみることにしました。

実際に見てみると、本当に純粋な天然水で、心が洗われていくような心地良さを感じました。手に湧き水を溜め、「目が良くなりますように」と願いをこめて目を洗いました。

並んでいる人の中には、湧き水を飲んでいる人もいました。普段水道水を使用して生活している私は、何も殺菌せずに飲める湧き水があることを知ってとても驚きました。

そこで私は、災害などで水道水が使えなくなった際に、天然の湧き水や井戸水、川の水を生活用水として活用できるのではないかと思いました。被災した際に必要な三日分の水を確保できなかったときに、地域の天然水が活用できることを知っていたら心強いと思います。そして、その天然水をきれいに保つことが、災害時の安定した生活につながります。

今から十九年前の九月に台風十四号が宮崎県を襲い、記録的な豪雨をもたらしました。多くの河川が氾濫し、一級河川、大淀川の下流域である宮崎市は、大きな被害をうけました。宮崎市の多くの地域で長い間断水になり、祖母の家でも水が出なくなりました。しかし、祖母の家には、キッチンや手洗い場、お風呂場に井戸水が通っているため、不自由なく暮らすことができたそうです。お風呂にも毎日入ることができ、洗濯もできたのは井戸水のおかげだと話してくれました。

私は祖母の話を聞いて、大淀川について調べてみようと思い、「大淀川学習館」という施設に行きました。その施設には、古くて大きい「揚水ポンプ」が展示されています。揚水ポンプは、大淀川を直接汲み上げるもので、昔から発生していた大きな干ばつから救うために昭和二年に購入されたものでした。当時、水騒動まで発生した干ばつでしたが、この揚水ポンプを設置してからは、田畑が潤い、平和な生活を取り戻せたそうです。

今も昔も、井戸や揚水ポンプなどの技術と天然水に助けられていることが分かりました。今は水道水があるため不自由なく暮らせていますが、いつ災害がおきて、日常生活が著しく制限されるかは分かりません。備蓄水の一つの選択肢として、地域の天然水を活用するために、必要なことを考えました。それは、身近にある井戸水や湧き水、川の場所を把握することです。さらに、きれいな天然水を私達が後世に残すことも忘れてはいけません。

そこで私は、宮崎市にある湧き水をインターネットで調べました。県内には百ほどあるようですが、宮崎市には見つかりませんでした。しかし、私は実際に天然の湧き水を見ています。もしかすると、湧き出ている量が少ないなどの理由で、湧き水として認められていないのかもしれないと思いました。

インターネットにはのっていなくても、確かに存在する湧き水があります。それを知るのは、地域に長く住む方々です。話を聞いてみると、意外な場所に湧き水を発見することができるはずです。

日本は天然水に恵まれている豊かな国です。きれいな水を守り、輝かせて未来へ繋いでいく。これが日本に住む私達の使命だと思います。水がきれいだからこそ、困ったときに活用することができるのです。私個人でできることは小さなことかもしれませんが、それが積み重なれば、水資源を守ることにつながります。「これが日本の天然水だよ」と後世で胸をはれるようになりたい。湧き水と井戸水に触れて多くのことを学んだ私は、強くそう思いました。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水道大国ニッポン

ベトナム　ホーチミン日本人学校　三年　中田　凪咲

「うわ、また出た。」目をこすりながら蛇口をひねった直後、水道が今にも破裂しそうな音をだしながら、勢いよく出てきた。小さな汚れをたくさん含んでいる茶色に染まった水を見て、今日も落胆する。そうだ、昨日は断水だった。別に、驚いたり叫んだりはしない。この水を見るのが何回目か数えきれないからだ。日本から飛行機で約六時間、カンカン照りの太陽とおびただしい数のセミの鳴き声と共に始まるベトナム、ホーチミンの朝だ。

人口一億人目前、現在急激な経済成長を遂げている国ベトナムでは、年々増え続けている高層ビルの建設や交通機関の発達に伴う、深刻な環境問題が課題となっている。その中でも近年、より問題視されている環境問題が「水質汚濁」だ。ベトナムの水質汚濁の原因は生活排水や産業排水、市民による河川や湖へのゴミのポイ捨てなど複数の要因があるといわれている。

私がベトナムに越してきてから約二年、日々の日常の中で「汚い水」を感じる機会が沢山あった。大雨が降る度に排水溝から汚い水があふれ出し、バイクを降りて押している人々の姿。有名なメコン川の船の中からみえるのは、透明とは正反対の水。これまで私が暮らしてきたシンガポールや日本とはかけ離れていた。

「なぜ日本の水は、綺麗で安全なのか。」様々な場面で、幾度も頭に浮かんできた疑問。この疑問を抱えながら、ベトナムから初めて日本に一時帰国をしたとき、この疑問の答えが少し見えてきた。

祖母の家で夕食の準備をしている時、祖母が当たり前のようにみそ汁に使う水を蛇口から鍋に入れていた。私はベトナムの蛇口の水が頭をよぎり、驚きながら「え、蛇口の水で大丈夫？」と、とっさに口にしてしまった。すると祖母は、笑いながら私にこういった。「何を言っているの。ここは日本よ？大丈夫に決まっているじゃない。」私はこの言葉を聞いた時、祖母の日本の水への信頼の強さに驚いた。この祖母とのエピソードだけにとどまらず、公衆トイレの洗面台の水で歯磨きをしている女性、公園の蛇口から水を飲んでいる少年など東南アジアの国々ではとても見かけられないような光景をベトナムに帰るまでの間、たくさん目の当たりにし、日本人の自国の水への信頼の大きさを強く実感することができた。日本の水がこの信頼を得るまでには、きっと多くの方々の努力と時間が費やされてきたことだろう。私は水の整備に尽力をされた先人の方々へ思いを馳せた。

日本は明治十年に起きたコレラの大流行をきっかけに、明治から大正、昭和、平成、そして令和、約百四十年の時を超えて、上水道の普及率九割、下水道の普及率八割を超える世界有数の水に恵まれた国に発展したとのこと。現代の日本に住む人々が祖母のように、当たり前のように水道水を使えているのには、日本の水資源を豊富に手に入れられる自然の恵みに加え、先人たちの努力の賜物であることを身に染みて感じた。

現在、百九十六か国ある国々の中で水道水が安全に飲める国は僅か十二か国だという。安心して飲める水が身近になく、苦労している人々が大多数の世界の中で、蛇口の水が飲めるという恵まれた環境の日本に生まれたことに、私たち日本人は感謝しなければならないと思った。

私が住むベトナムでも、日本のＪＩＣＡを含めた支援団体により、下水道・排水システムの整備の支援が行われているという。二〇五〇年までの先進国入りを目指すベトナムにとって、水の整備は重大な課題の一つであるだろう。二十六年後、私は四十歳を迎えているが、その時にはベトナムに足を運び、ベトナムの蛇口をひねって、透明の綺麗な水を見て、感激の声をあげてみたい。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

おばあちゃんとの旅

香川県　高松市立国分寺中学校　三年　山下　花音

「あんた、水使いすぎやで。」

私のおばあちゃんの口癖である。正直、おばあちゃんの気持ちが最初は理解できなかった。今では、蛇口をひねったら、いつでも水道から水はでてくるし、使いすぎても世界中から水がなくなるなんてありえない。時代遅れの口癖であると思い、いつも聞き流していた。しかし、おばあちゃんと行ったため池と香川用水記念公園、おばあちゃんの農業の手伝いという経験が私の水に対するイメージを大きく変えた。

瀬戸内海型気候に属する私たちの地元である香川県は、非常に温暖でかつ乾燥した気候を持つことで有名だ。年間降水量も、千百五十ミリと、他県と比較しても非常に少ないという特徴がある。私たち讃岐県民が「うどん県」と誇りをもつ、うどんに使われる小麦もこのような気候だからこそ育てることが可能である。しかし、私は、この気候がどれほど多くの人の暮らしを困らせ、過去の人々がそのことに立ち向かって今の私たちの快適な暮らしにつながっているのかを全く知らなかった。私は、おばあちゃんに連れられて、ため池と香川用水記念公園に行き、香川県の水の歴史について学ぶことになった。香川県は昔、「旱天五日に及べば水湿の潤いなく霖雨二日に及べば洪水の恐れあり」と言われるほど、飢餓者が続出するほど雨が降らない時期が長期間続いたり、時には、大雨による鉄砲水や暴風で民家や農作物等に深刻な影響を与えたりするなど、人々を悩ましていた。それに立ち向かったのが西嶋八兵衛をはじめとする先人たちなのである。彼らは、数年で九十余のため池を築造したり、東西に流れる香東川とよばれる川を一本化したりして問題解決を図ったのである。また、その何十年後かに、ため池に加えてより十分な用水の確保を行うため、香川用水が建設されることになった。香川用水とは、高知県の早明浦ダムを水源に、徳島県の池田ダムを経て、香川県に水が供給されている多目的水路である。このように、今私たちが当たり前のように水を使っていることは、当たり前の自然の成り行きではなく、多くの人々の苦労や努力、他県との協力があるからこそだと気づかされた瞬間であった。おばあちゃんは、そのことを私に伝えたかったのだと思う。

私のおばあちゃんは、農家であり毎年多くの農作物を育てている。この夏私は、農家を少し手伝った。すると想像以上に大変であった。朝と夜に満遍なく水をかけなくてはならない。気温が三十度を超えても台風が接近していて風が強くなっていても、水をかけたり、手入れをしたりしなければならない。おばあちゃんに圧倒されるばかりだった。おばあちゃんの家で食べた、ミニトマトや茄子、キュウリのサラダは、水分を多く含んでいて、とてもおいしかった。おばあちゃんは、「今は昔よりもほんまに楽になったわ。」と言っていた。昔は、水を井戸からくむ作業から始めないといけないため、今よりももっと労力をかけなければならなかったそうだ。おばあちゃんとの旅によって、私は水を使うことの大切さや、先人たちの努力に感謝しなければならないことを肌で感じることができた。お盆になって、はとこがおばあちゃんの家に遊びに来て、水鉄砲で遊ぶため、水を大量に使っていた。

「あんた、水使いすぎやで。」

おばあちゃんの言葉がいつもより新鮮に聞こえた。

シャワーズ賞（優秀賞）

未来へ繋ぐ水源

徳島県　鳴門教育大学附属中学校　二年　柳本　紗那

「いただきます。」

私は、祖父母の作るお米が大好きだ。我が家の米作りは、少し変わっている。

私の住んでいる吉野川市は、日本三大暴れ川として有名な吉野川が、県を東西に流れている。この川のおかげで、徳島県では水不足に陥ることが、あまりない。だが、私の住んでいる所は、山の麓であり、米作りの際、水を引く川がない。そのため、我が家の米作りの水源は、家のすぐ横にある小さな皿池を利用する。皿池とは、窪んだ土地の周りに堤防を作って築いた、小さなため池のことだ。

毎年、稲が丈夫に育つまでの約四ヶ月間、皿池の水を常にはって水田に水を送り続けなければならない。祖父はその期間、毎日皿池の様子を確認し、水田の水位を調節し、管理してくれている。私は、田植えを終えたばかりの小さな稲苗が、朝日に包まれ、きらきらとした水田の中でしっかりと根を張って踏ん張っている、その光景が大好きだ。なんだか私も頑張ろうと背筋がピンとする。そして、水は、稲が立派に育つよう見守り、しっかり支えている。稲にとって水は母のような存在なのだろう。秋になると、たくさんの水を吸って大きくなった稲を家族総出で収穫する。我が家は、昔ながらの方法で、稲を刈って束ね、それを逆さにし、一週間程度干すのだ。そうすることによって、茎の養分が米に行き渡り、太陽に干すことによってアミノ酸が増え、旨味が増すそうだ。この手間暇かけた我が家のお米を近所の甘く美味しい湧水で炊くと、最高の逸品となる。

しかし、数年前の梅雨時、雨がほとんど降らず、皿池の水位が低下し、干ばつ被害に直面した。そのとき、家族総出で何往復もしながら川の水を大きなタンクで運んだのを覚えている。これは、祖父も経験したことがないと言っていた。私の母が小さいとき、この皿池の水位は今よりはるかに増していたそうだ。この皿池は、カブトエビやヤゴ、渡り鳥が飛んでくる。ついこの間、皿池で沢蟹を見つけた。沢蟹を見つけたのは、初めてだった。たくさんの生物が生息しているという事は、生物たちにとっても、良い環境なのだろう。皿池は、たくさんの生物たちにとって、生きるための大切な住処なのだ。

私は、今まで梅雨に降る雨が好きではなかった。気温が高く、雨が降ることで湿度も上がり、とても生活しづらい。おまけに、雨が降ることで通学にも影響がでる。だが、この雨こそが、米作りに必要不可欠な水源となることを知り、考えが１８０度変化した。この雨が山に降り、やがて川や皿池に集まり、私たちの生活に直結する。そして、私たちはこの雨によって、この水によって、今生きているのだ。この美味しいと言って飲んでいる水、美味しいと言って食べているお米や野菜、それはいつまでもあり続けるものではない。

近年、地球温暖化が進み、気候変動が増加している。降水量が多くても少なくても、気温が高くても低くてもいけない。ちょうどいいころ合いが必要だ。私たちはこの資源を守り続ける義務がある。水は、私たちにとって一番身近なものであり、だからこそ、その大切さや危機に気づきにくい。

私は、この我が家の米作りを受け継いでいくために、皿池を、そして水を守っていかなければいけない。この冬、祖父は少しでも皿池に水が溜まるよう、重機で掘って整備した。私も美味しい米が滞りなく作れるように、そして生息する生物たちが安心して暮らせるようにと願い、皿池に落ち込んでいた、竹林や木を撤去するのを手伝った。これからも私にできることを探し続けたい。

あなたも身近なものを通じて、水を守るためにできることは何か考えてみてほしい。これはどうなっているのだろうと思ったとき、それがあなたの新たな始まりなのだ。

中央審査会特別賞（優秀賞）

「地域をつなぐ水」

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　一年　林　はる

私は、宮崎県綾町という人口七千人ほどの町に住んでいます。綾町には、深い照葉樹林が広がっていて、そこから湧き出す水は澄んでいて名水百選に選ばれた「綾川湧水群」があり、ユネスコエコパークに認定されています。

小学校の授業で、そんな綾町を流れる川からとった水道水と下流の宮崎市の水を飲み比べると、綾町の水のほうがおいしいと思いました。しかし、同じ綾町でも家で飲んでいる水はもっとおいしいと気づき、家の水道水について調べることにしました。

私の家は綾町の中心部から離れた、山の中の尾立という地区にあります。尾立地区では、綾町の水道水ではなく、尾立水道組合の水を使っています。私は、長年水道組合の係をしていたおじいさんに話を聞いてみました。

尾立地区では、五十年程前にみんなの総意で水道について決め管理する水道組合という仕組みを作りました。役場が供給する上水道ではなく、地域の人が交代で機械係、会計係などの仕事を行い、水道水に入れる薬についても自分達で考えて決めることができます。

川の水は雨が降るとろ過しても濁ってしまうため、綾北川の地下二十メートルのところから、ポンプで水をくみ上げています。

この水は、まず養豚センターという施設のタンクに行き、そこから水道組合のタンクへと運ばれます。そして、そこで四段階に分けてろ過されます。その後およそ三十世帯へ運ばれていきます。

尾立の水がおいしい理由の一つに、消毒薬が入っていないということがあります。消毒をしなくても、菌がほとんど含まれていません。さらに、ミネラルやカルシウムなどの栄養分も多く、ｐｈという数値も宮崎市は五・二、綾町は五・八と酸性ですが、尾立は七・一と中性に近く、体にもいいそうです。

尾立の水道組合で大変なことは、水道を利用している全世帯の人が参加して、自分たちでタンクやポンプ場の草刈りや掃除を行い、二か月に一度検針をすることです。また、台風が来ると電線が森の中を通っているため停電しやすく、停電するとポンプが止まって、断水してしまうこともあります。

私は、水道組合のタンクの見学がしたいと思い、母と一緒に見に行きました。山の中に鍵のかかった門があり、鍵を開けて急な坂を上っていくと、山の頂上にタンクがありました。タンクは、思っていたよりも深く、底に砂が沈んでいて、上の方のとてもきれいな水が、少しずつ次の槽に流れていました。タンクでろ過するだけで、こんなに水がきれいになると知り、驚きました。

上水道の場合は大腸菌が少しでも入っているといけないので消毒する必要がありますが、簡易水道は、水を使う人々が消毒するかどうかを自分達の責任で決めることができます。尾立の水もほんの少量の大腸菌が検出されることがありますが、その危険性を分かった上で、消毒薬の味がしないおいしい水を選択してきました。

このような問題について、色々な人の多様な考えを聞き合うことで、みんなが納得いく水道水を作っています。水を通して地域の人々がつながることができているのではないかと思います。

自分が毎日飲んでいる水について知ったことで、水を守ることは川や森を守ると同時に地域の人々のつながりを大切にしていくことだと考えるようになりました。これからも、地域の一員として、水道組合の清掃に参加するなど、尾立ならではの水道水を大切にしていきたいと思います。